

---

# とある幻想の原点放出

頭脳砂漠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある幻想の原点放出

### 【Nコード】

N9055Z

### 【作者名】

頭脳砂漠

### 【あらすじ】

学園都市順列外絶対能力者???浅導一。彼の能力は学園都市で最も強い。幻想殺しの少年よりも。そんな最強の能力を持った一の物語。この物語が告げる彼の行く先は、導かれる道は……!?!絶対能力者(レベル6)が科学と魔術の物語に強制に介入させられた場合、ゆつくりと、そして確実になにかが動き出す???的な。

## ブローグ

シュー…………シュー…………

蒸気がリズムよく鍋のような機械から上がっている。

「シュー、シュー」

それに合わせるように口から蒸気の音真似をする少年がその機械の隣に突っ立っていた。まだ8歳程度だろうか。少々幼いが、目は魚のような死んだ感じである。その少年が機械に合わせてシュー、シューと言ってから既に30分が経とうとしていた。その瞬間、大人数の大人の大声が聞こえた。

「いたぞ！あのクソガキが！手こずらせやがって！ブチ殺してやる！」

その言葉にはその大人たちの精一杯の殺気が込められていた。

しかし、少年は全く動じない。未だその大人たちの方を見ながら呆然と突っ立っている。大人たちは少年に向かって走り出す。

刹那。少年の口元が上にニヤリ、と上がった。

そしてその怪しげな笑みを浮かべたまま、少年はこう嘲笑うかのように呟いた。

「????あはっ」

少年が嘲笑うかのように呟いたモノは年齢相応の笑顔だった。

しかしその1分後、その少年の前にいたのは少年を捕らえて喜んでいる大人たちではなく、目を開けたまま地面に寝転んでいる大人たちだった。しかも、血。????そう。大人たちは血塗れなのである。

「つまんないの」

少年は去っていった。大人たちの中に生き残りがいることも知らず。そしてその生き残りに全てを見られてしまったことを。その生き残りが

????学園都市からの刺客だということを。

ビビッ……………ビビッ……………

『襲撃データ 完成致しました。再生しますか？YES or NO?』

空気中表示されたディスプレイに2つの赤と青の枠が出現した。生き残りの男は迷わず上の赤???YESを触った。

『選択、了承しました。では再生していききたいと思います。』

襲撃者と思われる人物を3人挙げ、それぞれの能力を当てはめて行きます。

まず第1の襲撃容疑者は学園都市レベル5順列1位『アクセラレータ一方通行』。

彼の能力は『ベクトル変換』。運動量・熱量・光量・電気量など、体表面に触れたあらゆる力の向きを任意に操作する能力とされています。

第2の襲撃容疑者は学園都市最もレベル5に近いとされるレベル4

『おかざきしの岡崎詩乃』。

彼女の能力は『ハイドロマスター水流結露』。水分を操作する能力とされていますが、能力応用で氷も操作出来るのではないかと統括理事会による会議が行われています』

ここまで2人の襲撃容疑者が出たが、男はその2人ではない、と確信した。

なぜなら彼らの顔は知っているからだ。

つまり……………

「最後のコイツが襲撃者……………だな」

ビビッ……………ビビッ……………

『第3の襲撃容疑者は学園都市外、千葉県に自宅を構えている』せん浅導一。とくはちゅうしかし、彼は一般人であるとされ……………』

そのディスプレイの横にもう1つディスプレイが現れ、ある1人の少年の写真を映し出した。

「！コイツだ……………」

『……………であるように原石とは見られてもいないただの人間です』

耳を疑った。でも、ディスプレイのスピーカからはこう聞こえた。

『彼が襲撃容疑者である確率はこの3人の中では……………』

『……………3%です』

## 超電磁砲（レールガン）（前書き）

ハイ！本編始まりました！  
よろしく願います！

## 超電磁砲（レールガン）

学園都市。

東京西部の未開拓地を切り開いて作られた街。

面積は東京都の3分の1ほど。

外周は高い壁で覆われている。

人口はおよそ230万人。その8割は学生である。

ありとあらゆる科学技術を研究し、学問の最高峰とされるこの街。だが、もう1つの顔がある。

人工的かつ科学的なプロセスを経て組み上げられた、超能力者養成機関。

脳を薬物投与・催眠術・電気刺激などで学生を『開発』することで、科学的に超能力者を作り出しているのだ。

超能力は各人によって様々な種類に分かれる。

しかし、価値や強さ、応用性などによって、無能力（レベル0）、低能力（レベル1）、異能力（レベル2）、強能力（レベル3）、大能力（レベル4）、超能力（レベル5）とされる。概念上では絶対能力（レベル6）というものが存在する。それは現在、公表されている資料ではないとされている。

しかし????

.....誰か。誰か助けて。いや、もう無理。僕死んじゃう。

ある少年が頭の中で精一杯の思想を巡らせる。  
彼の目の前にある光景は凄まじいものだった。  
???ある意味で。

バチバチッ！

「ああああああ！メンドクサイわねもう！」

先程から叫びながら体中から電気を発している少女が少年の前にいた。

少女の周りには意識を失って倒れているスキルアウト（街のゴミ）。  
まだ少しだけ残っている。しかし、それも少女によって意識を失う。  
そして、全員が気絶した頃。

「ちゃっちやと勝負しろやゴルアアア！」

「うおう！？」

少女があまりにもらしくない声出したので、少年はビクウ！と肩を跳ね上がらせた。それは、20分前に遡る???。

「なあなあお嬢ちゃん。俺たちと遊ばね？」

「……………」

公園のベンチに座っている少女???もとい、少年がスキルアウトにナンパされていた。男なのに。

しかし、男にしては可愛い顔で華奢な体つき。肩まである男にしては長めの灰色の髪に褐色の瞳だが、どこからどう見ても美少女にしか見えない。

よくあるのだ。彼???浅導一せんどういちには。

……………能力は凄いのに……………

毎回のようにそう思っているが、その能力をスキルアウトに使用したことはない。

間違つてやり過ぎて死んじゃったらどうしよう……………

などと考えるのだ。なので今回は????

「ぼ???」

僕は男なんですけど……………

と言おうとした一は、硬直した。

なぜか。それは????

「アンタたち女の子を1人で責めて恥ずかしい訳？」

1人の少女がいた。茶色で短めの髪。化粧がいらぬ程度に整った綺麗な顔立ち。お嬢様学校として有名な常盤台中学の制服。前髪か

らは青く光る電気が発されている。  
一はこの少女を知っている。名前だけなら学園都市中では誰でも知  
っているのではないか。

御坂美琴。

学園都市の超能力者（レベル5）第3位の発電系能力最強の『超電  
磁砲』。その人が目の前にいるのだ。そして……

バチバチバチッ！

その辺一帯に電撃を落とした。無論、一も巻き込まれた。  
そのことに電撃を落としてから美琴は気付いた。

……ヤバイヤバイヤバイ！罪ない人に電撃落としちゃった！…  
……よし！隠蔽しよう隠蔽！

「ちょっと待てえ????????い？」

煙の中から出て来たのは、一。しかも無傷である。それは人間にし  
てはあり得ないことだ。あり得るのなら????

……電気を吸収する能力？それとも盾系の能力？  
どうなんだろう……

そう考える美琴を尻目に一は怒りを爆発させる。

「殺す気かお前は！！あれ100万ボルトはあったぞ！？咄嗟に能  
力展開して良かったあゝ……取りあえずお前は謝れ！！超能力者  
（レベル5）って皆こんななのか？いや違う！！一方通行とか帝督  
は優しかった！！何故か僕にだけは！理由は知らない！！」

「なんの話！？っていつか第1位と第2位と知り合いなの！？コイ  
ッ何者……？って男！？」

「今更！？今更なの！？遅くね！？気付くの遅くね！？僕、男子制

服着てるよね！？間違つて女子制服着てないよね！？」

「男装好きの女の子かと思つたのよ！」

「知るか！！」

2人はぜえ……ぜえ、と息を切らしながら叫び合った。

「それよりもアンタなんで無傷なのよ！」

「あ、いやゝその辺のスキルアウト盾にしたから……」

「能力展開したんでしょ？」

「あ……」

「完全に言葉間違えたわね……」

………ば、墓穴掘つたあ？？？！僕死んじやう！

と、そこへ数人の男たちがやって来た。

外見は完全にチンピラだ。

そして1番前にいる小柄な男が甲高い声でこう言つた。

「アアニキイ！コイツら子供にやられてますよ！ギャハハハ！しかもどっちも女じゃねえか！」

プチッ！×2

次の瞬間。その男に1本の電撃の槍と1つの拳が突き刺さっていた。

「女（子供）って言うなあ？？？！！！」

「ゴベバア！！！」

そしてその男は数メートル吹っ飛び、黒焦げになつたまま………絶した。

「ふん！！！」

ナイスコンビネーションだった。しかし、その2人にある男が近付いて来た。それは、先程の小柄な男にアニキと言われていた人物。

1スキルアウトのリーダーなのだろう。かなりいい体格をしている。

無言で腕を振り上げ、それを振り下ろす。2人にその拳が当たる直

前。一がその男の拳を掴んだ。かなりの体格差があり、実際は不可能なほどだ。

……黒子でもあの拳は掴めないのに………！

あの華奢な体のどこにあんな力があるのだろう………

美琴そう思っていると、一はクルツと半回転し、その拳を肩に乗せ、大男を???投げた。

例えるならば、蟻がカマキリを1匹で食べるようなものである。

見事な一本背負い。そして大男は地面に叩きつけられ、気絶した。あまりに見事な一本背負いに他のスキルアウトもビビったようで、全員逃げ出した。そこに紛れて一も走った。美琴から逃げるため。友人の上条当麻<sup>かみじょうてんま</sup>が言っていた。

『御坂美琴って奴に会ったら気をつける。お前の能力がバレたら絶対に勝負を申し込まれるぞ。強制イベントだ。要らないイベントだろ。アッハッハ………不幸だ』

しかし、美琴は追ってきた。物凄い勢いで。

「勝負しろやコラアアアア！」

………当麻、僕も言いたいよ。じゃあ言っちゃうよ？  
せーの????

「不幸だ???!!」

## 超電磁砲（レールガン）（後書き）

美琴と一はじめの出会いですね。  
指摘などよろしくです。

## 暗殺ミッション

「ハッ！」

朝。浅導一は自分の部屋で覚醒した。

その顔はとても眠そうな顔をしていた。

?? 昨日、御坂に勝負かけられたけど……………無事逃げ切ったあゝ  
そう、昨日、御坂美琴に勝負をかけられた一は見事、逃げ切ったのである。

しかし、あまりの疲労に自分もベッドに飛び込んだ瞬間、眠りについたのであった。と、

ブーン、ブーン

携帯が鳴った。一はかなり驚いた。

なぜなら、彼の携帯には重要なデータが入っているので、ハッキングされないように電話帳を削ってデータを使っている。そのため、メアドや電話番号の登録ができないので、なかなかこちらから電話やメールをする機会がないのだ。

つまり、画面に出る電話番号は見覚えがあるようでない番号になる。  
ピッ

「はいもしもし」

『おはようございますー。超起きましたか?』

「ん? あー起きたよ」

『では超一言よろしいですか?』

「ふえ? あ、うん」

『一ちゃあゝん? 早く来ないとおゝ…………お・s』

プチッ

一は電話を強制的に切った。携帯で時間を確認する。

『AM11:35』

彼女らとの約束の時間を思い出す。確か??

『AM9:00』

「……………、ヤバッ!」

一はベッドから飛び起きてタンスを開けて、私服に着替える。  
??今日の服は、っと……………あれ?

「……………な」

「……………ななな」

「……………なんじゃこりやあゝ!!」

某刑事のようなセリフを吐き捨てた一。  
なにがあつたのか。タンスの中身は??

「スカートが……………4枚、男が着るには可愛らしすぎる服……………  
…たくさん??下着まで女物!?ブラジャーまであるし……………  
!ま、まさか……………ん?……………み、み、操祈イ???!  
僕に女物の服をそんなに着せたいか!」

一が発狂したのは、タンスから出てきた1枚の紙。  
そこには???

『ヤッホー!一が男物の洋服着てるの似合わないと思ったからあ、

女物の洋服買っただけだよ！ち・な・み・に、元々あった服はぜんぶ処分しましたあ。イエー！ミサちゃんいい子だね！一はちゃんと下着も履くんだよ！履いてないのはは・じ・だ・ゾ それとねえ、その下着の中に私の下着が入ってます！」

「ふざけるなあ！！僕に死ねと言うのか操祈！逆に死ねよ！！」  
しかし、

「これ以外着る服ないんだよなあ……」

それに、

「この中には操祈の下着もあるんでしょ……」  
やはり、

「…………ゴクリ」

「？？しょ、しょうがないじゃないか！健全な男の子ならみんなこうだよ！

しかも操祈のだよ！？」

そう、一の言う操祈？？（しほくほつみなぎ）食蜂操祈は学園都市超能力者（レベル5）  
第6位『（メンタルアウト）心理掌握』。それにかんりの美少女なのである。しかも長い金髪に中学生離れた抜群なプロポーション。それに学園都市生粋のお嬢様学校常盤台中学最大派閥に君臨する女王様ときたものだ。それで嬉しくない男がいる訳がない。しかし？？

「？？着たくない！死んでも着たくない！

一はかなり整った中性的な顔立ちをしていてよく女に間違えられる。だから、女物の服を着ていたらもうアウトなのだ。

そう、例えば女であっても……」。

一はどこかに自分の服がないか探す。しかし何処にも見当たらない。つまりは、

「？？も、もう履くしかない！！何も履かずに出たら変態で即逮捕だし…………土御門とか当麻とか青ピとかに私服をかしてもらっ

も嫌だし……………もう着るしかない!!

そして一は女物の中から服を取り出し服を着て、街に出るのだった。

「で？これが遅れた理由？」

「はいその通りでございますすみません麦野様だから僕の上に乗るのはやめて重いか嘘ですめちやくちゃ軽いですから麦野様あ!!」

「……………ふん！今日はこれくらいにしてあげる。でも次は……………お・し・お・き・よ？」

「はいいい!!」

ダッシュで走ってきた一は、学園都市超能力者（レベル5）第4位『マルチタウナー原子崩し』、学園都市暗部『アイテム』のリーダーこと麦野沈利に踏まれていた。

別に一がDMな訳ではない。約束を守れなかった罰として踏まれているのである。近くに3人??きめはたさいあい絹旗最愛、フレンダIIセイヴェルン、たきつほりう滝壺理后は一の顔を心配そうに見ていた。

絹旗は

「麦野、それ以上やると一から何かが超出てしまいますよ」

フレンダは

「遅刻だけどそれはやりすぎだと思う訳よ」

滝壺に至っては

「大丈夫。私はそんなはじめのことを応援してる」

「??どんな僕を応援してんの滝壺!? 意外と滝壺ってドS!？」

「ということだ」

「え? 何麦野? 僕に何をやらせるの?」

「アンタその格好のまま学び舎の園に入ってケーキ買ってきて」

「??は? え? 麦野さん何かの間違い……」

「な訳ないじゃない」

「ですよ」

なぜか思想を読まれた一だった。

一が出ていったからの学園都市暗部『アイテム』の隠れ家。

一が出ていったからすぐ麦野沈利の携帯が鳴った。

麦野は携帯を取って電話に出る。

そしてすぐに会話が終わった。

「……皆、暗殺ミッションよ」

「それで誰が超ターゲットなんですか麦野」

「……………それがね、

「なのよ？？」

## 暗殺ミッション（後書き）

はい！まさかの展開がやってまいりました。

次回は食蜂操祈と絡ませてみたいですけど………

指摘などよろしくお願いします

## 絶対能力

「あー疲れた……」

真っ白い袋を片手にぶら下げた少年？？浅導一はとても疲労感満載の顔で道を走っていた。

何故歩かないのか。

それは先程、麦野沈利よりこんなメールが届いたからだった。

『早くしろよ！！遅えんだよーえええ！！』

という脅迫である。

流石に風穴だけは空けられたくないので急いでケーキを買って帰ることにしたのだった。

現在、アイテムが使っている隠れ家はVIP会員制の高級ホテル。しかし、ホテルといっても家のようなものでそこに4人で住むには広すぎる。

さらに、麦野がそこのお得意様であるため、何日も滞在出来るように設定（脅迫）している。

一はダッシュでホテルに入り、ダッシュでエレベーターに入り、最上階13階のボタンを連打する。

そして、目的階に達すると、ダッシュで扉から出て、ダッシュで部屋に入った。

「はあ、はあ、麦野、買ってきた……………」  
しかし、そこに居たのは……………」

「あれー？どうしちゃったのかなー？なんで私の部屋にーがいるの  
お？」

風呂上がりで全裸の、一が最も会いたくない人間??食蜂操祈だった。

「ブッ!」

「ねえーなんでそんなに私の体凝視しちゃってるの?あ!もしかして私の体に欲情しちゃったあ?ならあ、お・い・で?」

甘あゝい言葉を一にかけた操祈は着ていたバスタオルを脱ぎ捨てた。一はその抜群なスタイルに目を向ける。

現在、一は中学2年生。思春期真っ盛りなのである。

つまりは……

「あれえ?ここが大つきくなってるよお?やっぱり欲情しちゃったんだね」

??こ、これ本当に操祈!?なんかいつもとキャラ違うような……

そう思った矢先、一は勢いよく引つ張られた。

ドサッ

そしてフカフカのベッドに投げられる。

??あれ?操祈ってこんなに力強いっけ?

……………この引つ張り方と力つて……………麦野っばいんだけど

「つてやめろよ麦野おおおお!!」

「あらあゝ?バレた?」

「完全に強引に引つ張るところが麦野だったよ!!この能力はどうせ有希のでしょ!!??で、なに?僕を殺したいの君は。統括理事会から僕の暗殺ミッションでも来たの?」

「来たわよ?」

「……………当たっちゃった!?怖い!すげえ怖い!!」

「と、言つことで」

パシユッ!

いつの間にか服をきて麦野に戻っていた彼女の右手から紫色のビームが発射された。

『マルチタウナー原子崩し』。正式には『粒機波形高速砲』。

電子を波と粒子のどちらでもない物に固定し、自由に操作出来る能力。

そして固定された電子は質量を持たない壁となり、その壁を高速で動かし、相手に叩きつける。

それが麦野沈利の能力。当たればひとたまりもない。

麦野はまず一を驚かせようと彼の顔に原子崩しを撃ち込んだ。マルチタウナー  
しかし????

「バア~~~~カ。テメエの攻撃なんざ俺には当たりやしねえんだよ」

「!？」

驚いたのは麦野の方だった。

気付いたら一が後ろにいた。上に乗っていたはずなのに、いつの間にかすり抜けていた。一瞬だ。一瞬で彼は麦野の足の間をすり抜けて、後ろに下がった。

しかし、おかしい。麦野は上に乗っていたのだから、絶対に気付くはずだ。

???まさか、

「アンタ空間移動系の能力者………なの？」

ありえることはそれくらいだった。空間移動系の能力なら、すり抜けても気付きはしない。だが、麦野の腰が落ちる。その人間の分だけ腰が落ちてしまうのだ。しかし、麦野の腰は落ちていない。宙に浮いている。

まるでそこに、まだ一の体があるように。

思えば麦野は一の能力を見たことがなかった。

麦野に限らず、絹旗、フレンド、滝壺も見ることがないと言ってい

た。

なぜなら彼の能力値<sup>レベル</sup>は紛れもなく『0』だ、と学園都市統括理事長アレキスター・クロウリーがそう言っていたのだから。

「お前がアレキスターの言葉をそのまま信じちまったのが悪いんだろが」

それと、

「???」口調が変わってる！しかも目が……

そう、誰もが今の一を見れば感じるだろう。

口調が荒すぎだ。

一は女性のような容姿をしているために、口調も若干女性っぽい。

一人称も『僕』であり『俺』ではなかった。

しかし彼は先程、『僕』ではなく『俺』と言った。

明らかに変わっている。

さらには、目の色までもが変わっていた。

いつも褐色という人間にはないような色だが、今回はもっとない色だ。

赤紫。

一の瞳の水晶体は赤紫に綺麗に染まっていた。

「は、一？どうしたの？」

「ハア？気安く俺の名前を言うんじゃないぞ」

「？もしかして多重人格者？でもあり得るならそれしかない……」

「お前、俺が多重人格者だかと思ってんじゃないぞええだろうな？俺は多重人格者じゃねえぞ」

「で、でもそれ以外は……」

「これは……『能力使用による副作用』だ。お前もそんな位知ってるんだろ」

「でも！一は無能力者（レベル0）なんじゃ……」

「お前！無能力者（レベル0）をバカにすんな。演算障害が効かね

えんだぞ。つーが無能力者（レベル0）でも『見えねえ能力』があるんだよ。……………つっても俺は無能力者（レベル0）じゃねえぞ」  
「え？それじゃあ」  
「俺はなあ……………」

？？絶対能力者（レベル6）だ」

## 絶対能力（後書き）

作中に出て来た『有希』という人物はオリジナルの人物です。

一応、アイテムの工作人員ですが、現在行方不明中。

でもなんで麦野が有希の能力を使っていたかは後に判明しますので、何卒よろしくお願いします。

榊原有希

フルコピー

能力：完全模写

## 保護ミッション

「絶対能力者（レベル6）……………」

「そうだ、絶対能力者（レベル6）だ。神と等々又はそれ以上の力を持つ者だ」

「でもまだ絶対能力者（レベル6）は存在しなくて、第1位が絶対能力進化実験を進めてるところじゃ？」

「だからさあ、お前は外部からの情報を信用しすぎなんだよ。お前はその情報を聞いた後に他のことを見たか？聞いたか？へえ、それで？で終わっただろお前の場合。それがいけねえつつてんだよ」

確かに麦野はアレキスター・クロウリーからその情報を貰った時、それ以上聞きはしなかった。しかし、それは仕方のないことだ。強い力は持ちたいが、強すぎでは意味がない。だから自分には関係ない、そう思ってしまったのだ。

だから実際、そのことについて裏情報を見るためにパソコンをハッキングしたり、見に行ったりしなかったのだ。

今になってはそれがこうなってしまうとは思わなかった。

それもそうだろう。なぜならこんな優しい容姿で性格の彼が無敵だとは誰も思わないだろう。さらには統括理事長から能力値は0だ、<sup>レベル</sup>と言われた。

これで信じない人間はよほど神経質でおかしい人間だろう。

それに、

「今まで能力を使わずにやられてたのは……………」

麦野は一がアイテムに来てから彼の強いところを1回も見たことがない。

ミッションに行つてはやられ、大怪我をし入院する。

麦野はいつも、

なんでコイツここに来たんだ？

つかアレキスターはなんでこんな弱いヤツを紹介したんだよ……

……  
と思っていた。

今になってようやくわかった。なぜ弱い彼が統括理事長から紹介されたのか。

麦野はおもむろに携帯を取り出し、3人を呼び出す。

携帯の液晶に『call To:Item』と出た瞬間。

のガラスを突き破って3人の女性が部屋に入ってきた。

アイテムメンバーの絹旗最愛、フレンダ・セイヴェルン、滝壺理后。

「超どうしたんですか麦野」

「結局、一はケーキ買うのにもめちゃくちゃ時間をかける使えないヤツって訳よ」

「……………？はじめからAIM拡散力場が出てる……………？しかもけつこう大きい……………？」

「「え！？」」

「<sup>はじめ</sup>一！？一は超役に立たない超女顔の超一無能力者（レベル0）だと思ってたんですが！？」

「おい絹旗ア！ぶざけんじゃねえぞ！俺は無能力者（レベル0）じゃねえ！」

「……………結局、一は麦野に調教されて能力が開化した訳よ」

「あ”アン！？」

「「ヒイイイ！！」」

「……………今そんな曲芸みたいな会話してる場合じゃないのよ。それより一。さっきのすり抜けるヤツはどうやったの？」

「さっきのか……………えっと、確か麦野から俺にかけられてる上からの運動エネルギーと位置エネルギーを上と中から固定して、そのままで俺が下からかけてる運動量のベクトルと空間エネルギー自体まんまを固定してそれからすり抜けた」

「？意味がわからないけどなんか今のことから麦野と一がエッチなことをしていたことが判明した訳よ」

「判明してねえよ！！バカかお前は！！」

「でも超エロく聞こえましたよ？上から中から下から固定って超S Mプレイじゃないですか」

「絹旗お前本当に小学生か！？」

「中学生です！！」

麦野は3人の会話を聞いて苦笑する。

「？？バカみたいだけど楽しい……」

と、そこに1本の電話が麦野の携帯に届く。

「はい？」

『絶対能力者（レベル6）についてはもうわかったかい？』

「アレイスター。お前の目的はなんだ」

『とりあえず、彼が絶対能力者（レベル6）だって言うことを君たちで最低限隠し通してくれないかい？』

「報酬は？」

『4人ずつに6億』

「！？」

『なんでこんなに報酬があるかわかるかい？それだけ彼はこの学園都市の重要人物ってことなんだよ。それに、もう絶対能力者（レベル6）がいることがバレたら学園都市の存在意義がなくなってしまう』

「……………わかった。一の暗殺はなくなって保護をしろってことだな？」

『そうしてくれるとありがたい』

ピッ

「超どうしたんですか麦野？」

「本人がいるところで言うのもあれだけど、一の暗殺ミッションはなくなったわ。そのかわり、一が絶対能力者（レベル6）だってことをこのアイテム隠し通すミッションが下った」

「え？一って絶対能力者（レベル6）だったんですか！？超嘘くさいです」

「……………なんか悔しい訳よ」

「…………夢を見てるんだ」

「お前らふざけんなあ!!」

## 保護ミッション（後書き）

指摘などよろしくお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9055z/>

---

とある幻想の原点放出

2012年1月8日22時50分発行